

アカ族の住まいにみる固有文化の支族的展開と文化変容

—タイとラオスにまたがるチベット・ビルマ語派のアカ族の比較—

主査 新井 清水^{*1}

委員 西本 太^{*2}, 畑 聡一^{*3}, ソンパワン・サイニャヴォン^{*4}

本研究は、タイとラオスにまたがって居住するチベット・ビルマ語派の民族集団、アカを対象に、かれら自身が強くこだわるクランや支族の違いに着目して、アカの伝統的な住まいの特徴を相対的に明らかにするとともに、かれらを取りまく社会環境の違いが居住文化におよぼしている影響の諸側面を指摘し、そのうえで、文化変容の地域的メカニズムについて考察することを目的とする、比較研究である。結語として、家屋の内部空間を男性側と女性側に二分して住まうことは、形式的にはアカ全般に共通するが、空間の意味内容が支族ごとに異なっていること、さらに、国家や地域社会とのかかわり方如何によって、文化の動態性が異なることを指摘している。

キーワード： 1)アカ, 2)ラオス, 3)ルアンナムター, 4)ポンサリー, 5)支族,
6)集落, 7)家屋, 8)タイ, 9)比較居住文化

A STUDY ON THE CULTURAL DIVERSITY OF THE SUBGROUPS AND CULTURAL CHANGE OF THE AKHA DWELLINGS

—A Comparative Study on the Akha of Tibeto-Burman Family Living across the National Boarder between Thailand and Lao PDR—

Ch. Kiyomi Arai

Mem. Futoshi Nishimoto, Soichi Hata and Somphavanh Sayavong

A purpose of this comparative study is to examine the mechanism of cultural changes between areas that are based on the Akha of Tibeto-Burman Family living across the national border between Thailand and Lao PDR. This explains special features of the Akha's dwellings relatively and point out the influences on living culture of different societies which they are surrounded by. In conclusion, living in male and female side separately is common to all of Akha, however, the meanings of that are different to subgroups. Moreover, this points out the relationships between them and society varies the dynamic nature of cultures.

1. はじめに

1.1. 研究の目的

アカは形象化された文字や記号をもたず、口承によってのみ、その文化を今日まで受け継いできた。このことは、かれらが自らの国家を形成するにいたらなかったことをも意味する。中国南西部をその民族的起源とするかれらは、生業である移動式焼畑農耕をおこないながら、新たな耕作地を求め、あるいは静いや戦乱を避けながら次第に南下し、現在では中国、ミャンマー、タイ、ラオス、ヴェトナムと、国境をまたがって居住している^{注1)}。

これまでアカの家屋あるいは集落を扱った研究は、北タイを中心に展開されてきた^{文5, 6, 7, 8)}。しかし、既往の研究では、帰属国家の異なるかれらを比較の俎上にあげて論じられることはほとんどなかったといつてよい。

ラオスのアカについては、これまでほとんど手がつけられてこなかったが、本研究会は、ラオス人民民主共和

国情報文化省文化研究所（以下、ラオス国立文化研究所と略す）協力のもと、調査研究が実現するにいたった。したがって本研究では、ラオスにおけるアカの住まいの実態と特徴を把握することを当面の目的としながら、長年おこなってきた北タイのアカを対象とした研究成果をふまえ^{文6, 8)}、タイとラオスのアカのあいだで比較研究をおこなうことを最終的な目的としている。比較検討の視座は、ひとつはアカ自身が強くこだわるクランや支族の違いに着目し、かれらの伝統的な住まいの特徴を相対的に明らかにすることである。アカでは、父親の名前の尾部を男子の名前の頭部に引き継いで、系譜を鎖状に繋いでいく、「父子連名制」という命名法がおこなわれている^{文9)}。この系譜はアカが「最初に生まれた人間」とするスミオから口述され、現在にいたるまで50世代以上にも及んで連続している。この系譜上の特定の始祖を頂点とする集団（アグ）がクランとされ^{文2)}、この集団ごとあるいはこ

^{*1} フリーランス（当時、ラオス情報文化省文化研究所 客員研究員）

^{*3} 芝浦工業大学工学部 教授

^{*2} 一橋大学大学院社会学研究科 博士後期課程

^{*4} ラオス情報文化省文化研究所 研究員

の集団を含むさらに大きな範疇である支系や支族によって慣習が異なるとされている。いまひとつは、かれらを取りまく社会環境の違いが住まいの文化に及ぼしている影響の諸側面を指摘し、文化変容を招来させる地域的メカニズムについて考察することである。不法に隣国から越境した難民とされ、苦境に立たされてきたタイのアカのあいだでは、急速に伝統が失われ、変容を遂げている。一方、多民族国家を形成する一民族として組み入れられてきたラオスのアカの場合、国家や地域社会とのかかわり合いのなかで、社会的文化的にいかに関係してきているのだろうか。

1.2. 研究の視点と方法

ラオスでは2000年になってから、自称である「アカ」がラオスでの正式な民族名称として認められたが、それ以前は「コー」という他称で呼ばれていた。ラオス国内におけるアカのサブグループは、プリ・ニャイ、プリ・ノイ、オマ、ヌクイ、ヌチ、パラ、ルマ、ウパ、コピエン、チチョ、チャポ、チュピア、ボチェをはじめ、十数あるいは二十数も存在するといわれている^{注2)}。

ラオスのアカは、そのほとんどがルアンナムター県とポンサリー県に分布しており（図1-1）、本研究では双方の県で現地調査をおこなった。ルアンナムター県には、ラオスでもっとも多く存在する支族とされるプリ・ニャイの集落が多数分布する。一方、ポンサリー県にはルアンナムター県のアカとは系統が異なる支族が多数存在するという現地での情報により、双方で調査を実施するにいたった。まずは予備調査として地域を横断的に踏査しながら、支系や支族についての情報収集につとめるとともに、各県でひとつ村を選定し、悉皆調査をおこなった。

現地調査の内容を表1-1に示す。本研究では、集落および家屋の形態や住まい方といった目にみえる事象だけでなく、生活を秩序づけ、精神的なよりどころとなる信仰や、集落のしくみとしての社会組織や社会構造を、物理的現象世界を支える要素として位置づけている。したがって現地調査では、実測とともに、子細な聴き取りや観察をおこなっている。

2. ルアンナムター県の事例

2003年の統計によれば、ラオスに居住するアカのおよそ4割が、ルアンナムター県のシン郡とローン郡に集中している。このふたつの郡では、郡人口の半数近くをアカが占めるものの、歴史的に政治経済面において優勢をふるってきたのは、低地に暮らすタイ・ルーである。しかし1970年代以降は、古くから山地に居住してきたアカをはじめとする諸民族集団も、山地の土地難、あるいは政府による集落再配置、水田耕作奨励策、保安上の問題などにより、低地に移動してきている^{文12)}。さらに急速に

進行する社会経済的開発によって整備された街道沿いに移転する集落も少なくない。

ローン郡とシン郡では、こうした移住村を対象から外して予備調査をおこない、プリ・ニャイのE村で悉皆調査をおこなった。E村での聴き取りによれば、「アカ・プリ・ニャイ」はラオ語による他称であるといい、これに相当するアカ語による下位集団名は「ジュゴエ・アカ」であるという^{注3)}。また、ルアンナムター県に居住する支族の事例として、本研究に先だってラオス国立文化研究所と共同で調査をおこなったチャポの家屋事例も紹介する。聴き取りによれば、ラオスにチャポの村はふたつしかないといわれ、いずれもシン郡に位置している。

2.1. E村の概要

E村はシン郡中心部からおおよそ10km北方、標高1,000m前後に位置する。村までは自動車道路が行き届いておらず、人里離れた山あいにある。村には国際援助によって3カ所に簡易水道がもうけられているが、未電化である。戸数34、人口201人（うち女性100人）を擁するE村では、焼畑農耕とともに家屋の周囲では動物を飼育し、さらに周辺の森や川で狩猟採集活動をおこないながら、おおむね自給自足の生活を送っている^{注4)}。

E村の祖先は、中国からビルマを経由してラオスに移動してきたという^{注5)}。ビルマからラオスへはローン郡から入り、シン郡に最初の居住地を定めて以来、現在居住する場所周辺一帯で幾度も村を移動させている（表2-1）。ラオスにいたった年代は不明とされているが、ラオスに居住してすでに5世代を経過していることなどから、1860年代前後にはラオス領内にいたったのではないかと考えられる。さらに1970年代前後には、E村から3つの村が分枝した。最初に分枝したのは1968年、世帯数が増え過ぎたことから、村の半数が6番目の土地へ、もう半分がローン郡へ移動して新たに村を創建した。のちにこの新しい村からさらに村が分枝している。いまひとつは1975年、ラオス内戦時にE村周辺で活動していたパター・ラーオのメンバーに請われ、シン郡の中心部近郊に住むことを勧められたある村びとが、親戚などを連れて移住していったことにより、分枝したものである。

2.2. 霊的存在への信仰

村には、周辺の村々を結ぶ山道にいたる村の斜面上方と、川へといたる斜面下方の2カ所にロッコンと称する「村の門」がもうけられている。このふたつの門の内側が「村のなか」、門の外側が「村の外」とされている。

かれらのあいだで一般に「ネ」と呼ばれる霊的存在は、「ホエネ」と「ニネ」のふたつに区別されている。「ホエネ」は「村のなか」にいる霊であり、祖霊のことだという。祖霊は「よき霊」とされ、家屋内部にしつらえられ

村びとの家屋がもうけられる「村のなか」は人間の世界として、「村の外」は無数の霊がいる世界と認識されている。したがって、これらの境界を明示する村の門は、とりわけ重要視されるしつらえである。このような村の門に触れることは禁忌とされ、さらに日常・非日常時を問わず、村の門の下をくぐるべきではないとされている。

霊との関係からみれば、かれらは自らの生きる世界を、村を単位にして考えていることがわかる。したがって、霊的存在と村びととのあいだを取りもつ特定の役割をもった村の役職者は、祭祀や儀礼をとりしきり^{注6)}、村を運営、存続させる責務を負った、不可欠な存在である。

バジは鍛冶師である。農具はつくらず、刃物のみをつ

ボエモは祖霊とかかわる能力をもつ祭司であり、祖霊が原因とされる病気の治療や厄払いの儀礼をとりおこなう。その役職は息子に世襲されるが、ボエモの息子でなくても、ボエモから技術を習得すれば、ボエモになることは可能だという。村に複数のボエモがいてもよいとされるが、E村にはひとりだけである。

ンゴジョアダは、結婚および葬送の儀礼をとりおこなう役職者で、儀礼の知識や技術を習得した男性なら誰でもなりうるとされる。E村のンゴジョアダは死去したが、ボエモがンゴジョアダの職務を遂行できるとされる。

さらに村には、中央政体に依拠する行政機構の末端としての組織体系がある。E村では、図2-1のような序列をもっていると説明された。かれらのあいだでは、単に歳

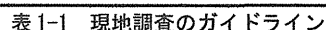
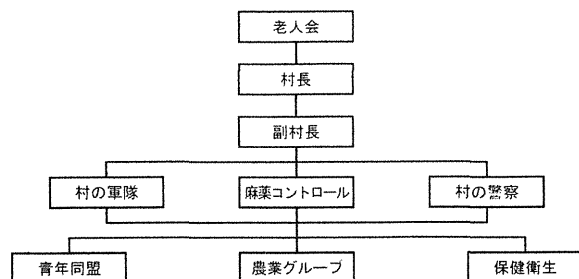
表 2-1 ラオス国内における E 村の移動歴

図 2-1 E 村の行政組織



を重ねれば「老人」という敬称で呼ばれるようになるが、好人物であり、アカの文化について精通していなければ、「老人会」に入ることにはできないとされている。このように、村にはふたつの組織体系が存在することになるが、村びとによれば、行政に依拠する役職や組織は、「村の所有者」たるズマのもとにあるのだという。

2. 4. E 村の親族体系

E 村はティプ、ビョカ、ビョムウ、ビョチュ、マグの5つのクランで構成されている。ティプとビョムウは系譜上でもっとも近く、それぞれの始祖であるニフとニチェは、クニを父親とする兄弟であるという^{注8)}。ビョムウはニチェ以下、チェタ、タゴ、ゴツァ、ツァソと連なるが、このツァソの息子ソテを始祖とする集団がビョカであるという。ビョチュは、さらに世代を経てから分枝した、ビョチュを始祖とする集団であるという。

系譜が男子の名前で連続していることから明らかにように、アカは父系社会である。E 村ではクランが外婚単位となっており、たとえほかの村の人と結婚する場合でも、同一クラン内での結婚は禁忌とされる。

結婚後、夫婦はしばらくのあいだ夫側の生家で暮らす。すぐに独立することは許容されていない。また、世帯や家屋を継ぐのは、父親が亡くなったときに同居していた最年長の息子とされる。女性が継ぐことは「ありえないこと」とされ、息子がいない世帯では、親族関係者から養子をとっている。

2. 5. 村のつくり方

E 村はラオス領内において6回村を移転させている。村を移転させるべきときとは、1. 畑の地味が衰えたとき、2. 「村のなか」に家屋を建設する場所がなくなったとき、3. 村で多くの病人や死者が出るなど「悪いこと」が続いたとき、であるという。そして、新しい土地に求める条件とは、1. 魚が多く水棲する川に近いこと、2. 焼畑が可能かつ地味のある山が近隣にあること、3. 家屋の材料となる木材が迅速かつ豊富に入手できること、であるという。村の移転にさいしては、まず移動の時期を決め、それに向けて各世帯で家屋の建設材料の準備に取りかかるという。

村を移転させたらまず、1軒の家屋を建設する^{注9)}。この作業をおこなう前日に、村びと全員が移動を完了させ、世帯ごとに土地を割り振って簡単な仮小屋を建設し、集落の主要通路をつくる。それぞれの家屋は、最初の1軒の家屋を建設した翌日以降、世帯ごとに「よい日」を選んで建設される^{注10)}。村の門は、移転の時期を問わず、村の門をつくる年中儀礼の機会を待ってつくられる。

調査時点でのE村の概観を図2-2に示す。村は東から西へと傾斜する片側斜面に立地し、村の中心を貫くように、最大傾斜方向と等高線と一致する方向とに主要通路がもうけられている。それぞれの家屋は、棟の向きを等高線に一致させるようにして建てられている。

さらに図では、クランごとの家屋配置も示している。E 村では土地分配にさいして、まずおおまかにクランごとの居住場所を決めてから、クランごとで話し合っ、それぞれの家屋の建設場所を決めている。したがって、もっとも大きな集団であるティプが自動的に村の中心を占めながら、クランごとのまとまりをみせている。

2. 6. 家屋の特徴と住まい方

1) E 村の現在の家屋と住まい方 (図 2-3)

E 村では、家屋と複数の付属屋によって屋敷の「構え」をなすような事例はごく少数である。家屋の周りに家畜舎や穀倉はもうけられず^{注11)}、ニュヤと呼ばれる下位世代の夫婦が就寝する小屋がわずかにみられる程度である。

E 村の家屋（ニュン）はすべて高床式（ニュンゴ）である。その内部空間は、中央の仕切り壁（ロカ）によって、男性側（ボロボウ）と女性側（ニュマポウ）とに分けられ、男性側が常に村の主要通路側に向く。さらにそれぞれの空間は、棟の方向に一致する1本の敷居（ホド）によって、斜面上方の空間（ウワ）と斜面下方の空間（ツォドゥ）に分けられる。双方の空間にレベル差は生じていないが、ふだんは斜面下方の空間まで土足で歩き、敷居手前で履物を脱いでから斜面上方の空間に入る。

斜面下方の空間には炉がもうけられ、おもに食事や炊事の間となっている。炉は仕切り壁際や女性側の隅部にもうけられるが、双方にもうけるか否かは世帯によって恣意的である。ふだんの使用法にもきまりはなく、どの炉で食事をつくってもよいとされる。食事の場所も、男性側と女性側、どちらでもよいという。

おもに就寝の間となる斜面上方の空間では、斜面上方に頭を向けて横臥する。E 村では、男女それぞれの仕切り壁際に就寝する人を、「家屋を所有する父親」（ニュンサンアダ）、「家屋を所有する母親」（ニュンサンアマ）といい、世帯の最年長の男女がこう呼ばれている。家屋に就寝できる世帯員は、1組の夫婦と15歳未満の男児と未婚の女性である。15歳以上の男子は、結婚するまでほかの世帯の家屋（おもに男性の戸口前の軒下）に就寝する。

また、世帯に2組以上の夫婦がいる場合、より年長の夫婦が家屋に就寝し、それ以外の夫婦は屋敷内に就寝のための小屋（ニュヤ）をもうけて就寝する。

祖先の祭壇は女性側の仕切り壁際、斜面上方の隅上部にしつらえられる。祖先の祭壇に触れうるのは、祖先祭祀の機会のみ、しかも祖先祭祀の執行者である世帯の最年長の男性に限られている。

戸口は男女双方にもうけられるが、女性側の戸口については、実質上使用していない世帯が多い。露台（グガ）は男性側にのみもうけられる。

足踏み式の精米機（ミツン）は、女性の戸口外側の軒

下か女性側の床下に置いている。床下の空間にはこのほか、薪やニワトリを収容するカゴなどを置いている。

ただしE村では、仕切り壁をもうけていなかったり、斜面上方の空間の途上で途切れている家屋がおおよそ4割を占める。それぞれの家屋には、斜面上方の平側の中間付近に祖霊が宿るとされる柱（アピポロホズウ）が立っており、仕切り壁はこの柱の位置から斜面下方にのびている。たとえ仕切り壁をもうけなくとも、この柱の位置を目安に、男女に分かれた住まい方がなされればよいとされ、壁で「仕切る」ことに強いこだわりをもっていない。

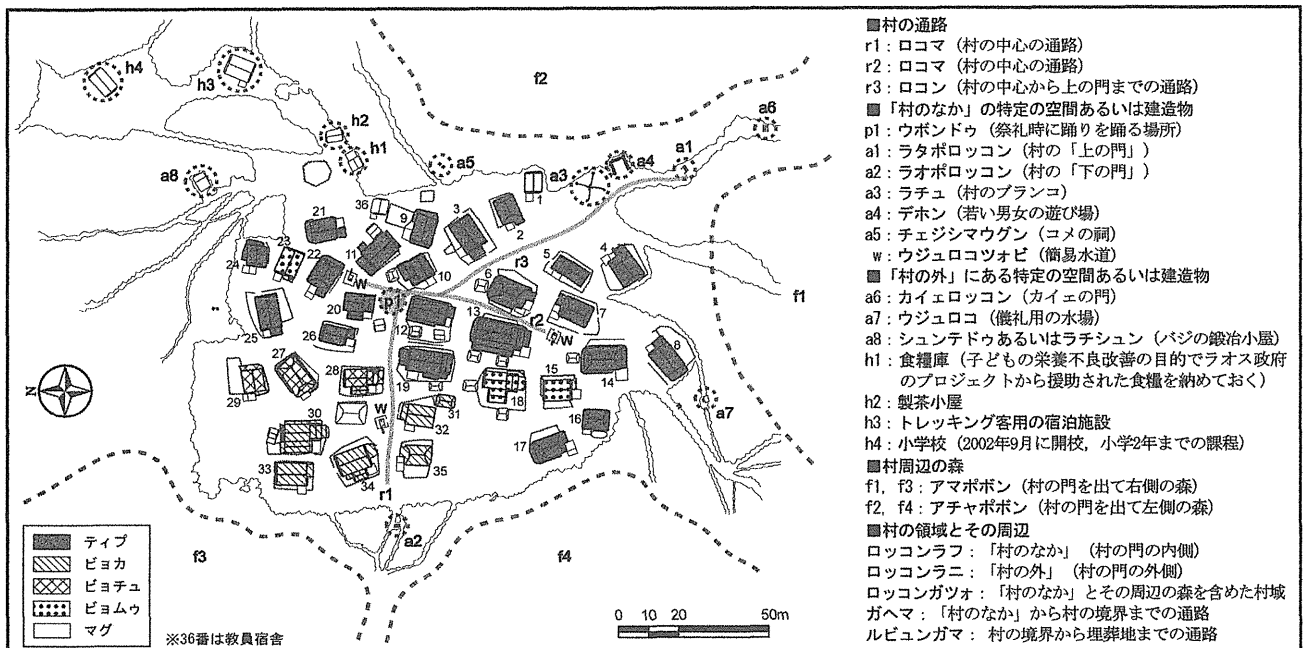


図2-2 E村の集落空間

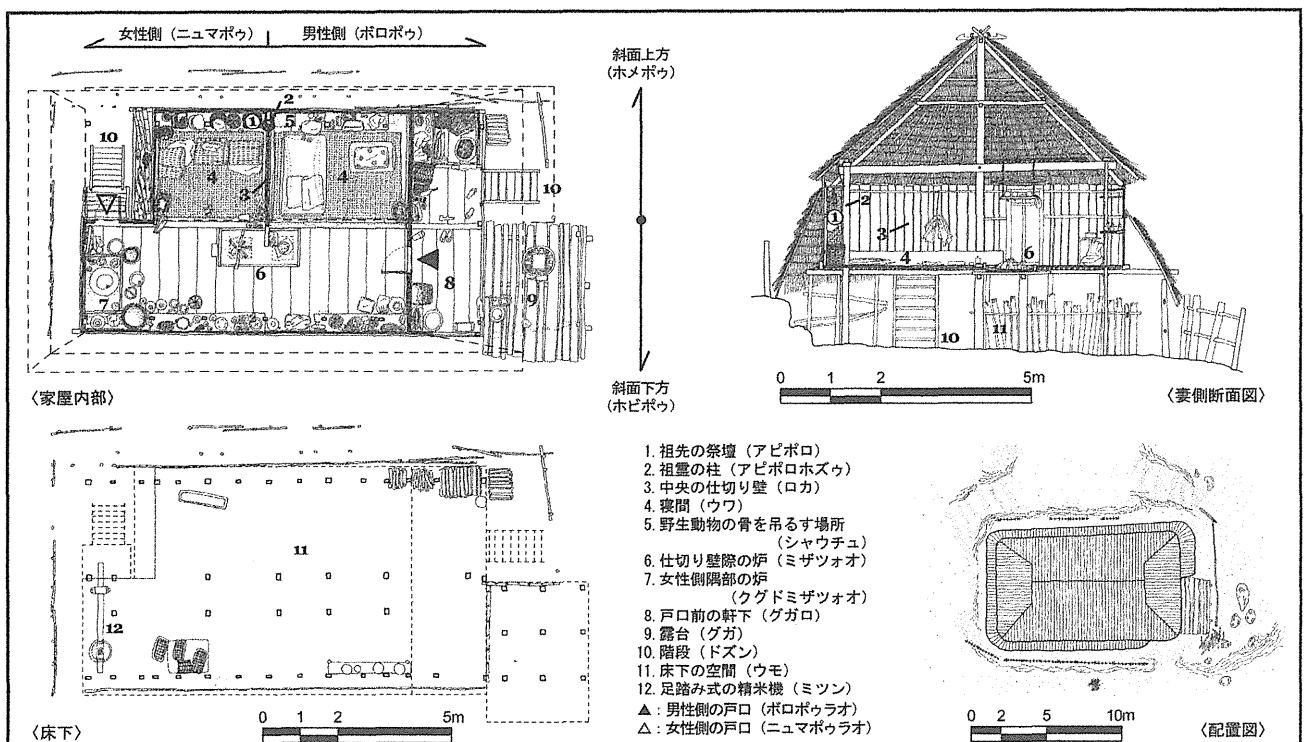


図2-3 E村の家屋事例 (図2-2中、家屋番号27)

2) V村の家屋の内部空間と住まい方 (図2-4)

V村に伝わる伝統的な家屋は地床式（ニュンオウ）であり、いまでもおすべての家屋が地床式である。かれらには、木材をふんだんに使った美しい高床式の家屋が、新築を祝う宴の最中に倒壊する旨の説話が伝えられている。さらに過去に一度だけ村で高床式を建設したさいに、村びとが亡くなったという経験から、地床式に強いこだわりをもっている。

家屋内部は、中央仕切り壁による男性側と女性側、および敷居による斜面上方と下方という平面上の空間分割法は、E村の事例とほぼ一致するといつてよい。しかし、立面および空間の使われ方は異なっている。

斜面上方の空間は、地盤面をそのまま利用した土間の空間（ツォドゥ）となっており、炉がもうけられ、煮炊きや食事の場となっている。ふだんの食事には仕切り壁際の炉（ツォハ、ツォビュンあるいはツォオ）を使用し、土間隅部の炉（ザボ）は、家畜飼料専用となっている。斜面下方の空間（ホドアタあるいはウヤ）には竹簀や木板で床を張り、土間よりも30cmから40cmほどレベルを上げている。この空間が就寝の場であり、ここでは頭を斜面下方に向けて横臥する。仕切り壁際に就寝するのは世帯の最年長の男女であるが、V村ではこのような男女を「誰よりも大きい父親」（イエソニアダ）、「誰よりも大きい母親」（イエソニアマ）と呼んでいる。子どもは10歳になると、結婚するまで米倉（どの世帯のものでもよい）に就寝する。世帯が2組以上の夫婦で構成される場合、家屋内部に就寝できるのは、より年長の夫婦1組だけである。より年少の夫婦は、女性の戸口から出たところに就寝のための小屋（ニュヤ）を建てて就寝する。この小屋

を男性側にもうけることは禁忌とされる。

祖先の祭壇は女性側の床上、斜面下方側の隅上部にしつらえられる。ただしV村では、すべての世帯が祖先の祭壇をもつわけではない¹²⁾。

戸口前軒下の張り出し（グガガチュ）と露台（グガ）は男性側のみにもうけるべきものとされ、女性側にはもうけるべきではないとされる。

V村では、仕切り壁を完全にしつらえているのはほんの数戸のみで、仕切りをまったくもうけていない家屋が半数以上にも上る。村びとは、仕切り壁をもうけていない理由として、家屋が小さい、祖先の祭壇をもたないことなどをあげている。V村では、仕切り壁は家屋に不可欠なしつらえであるとは考えられておらず、仕切り壁がなくても、家屋内部を理念的に男性側と女性側とに分けている。そのような場合、世帯の最年長者が自らの性とは異なる空間側に就寝するという禁忌さえおかさなければ、就寝場所についても厳密さを問われることはない。

3) E村にみる家屋と住まい方の変容過程

現在は高床式の家屋に暮らすE村であるが、伝統的な家屋形式は、V村のような地床式であるという。高床式への建て替えがはじまったのは、1980年代半ばからだという。現在のE村の家屋では、斜面上方の空間を就寝の場とし、斜面上方に頭を向けて横臥するが、地床式に暮らしていたころは、V村のように、斜面上方を土間とし、斜面下方の床上で、斜面下方に頭を向けて横臥していたという。つまり、現在のような最大傾斜方向に対する平面構成は、家屋形式の変化によってもたらされたということになる。

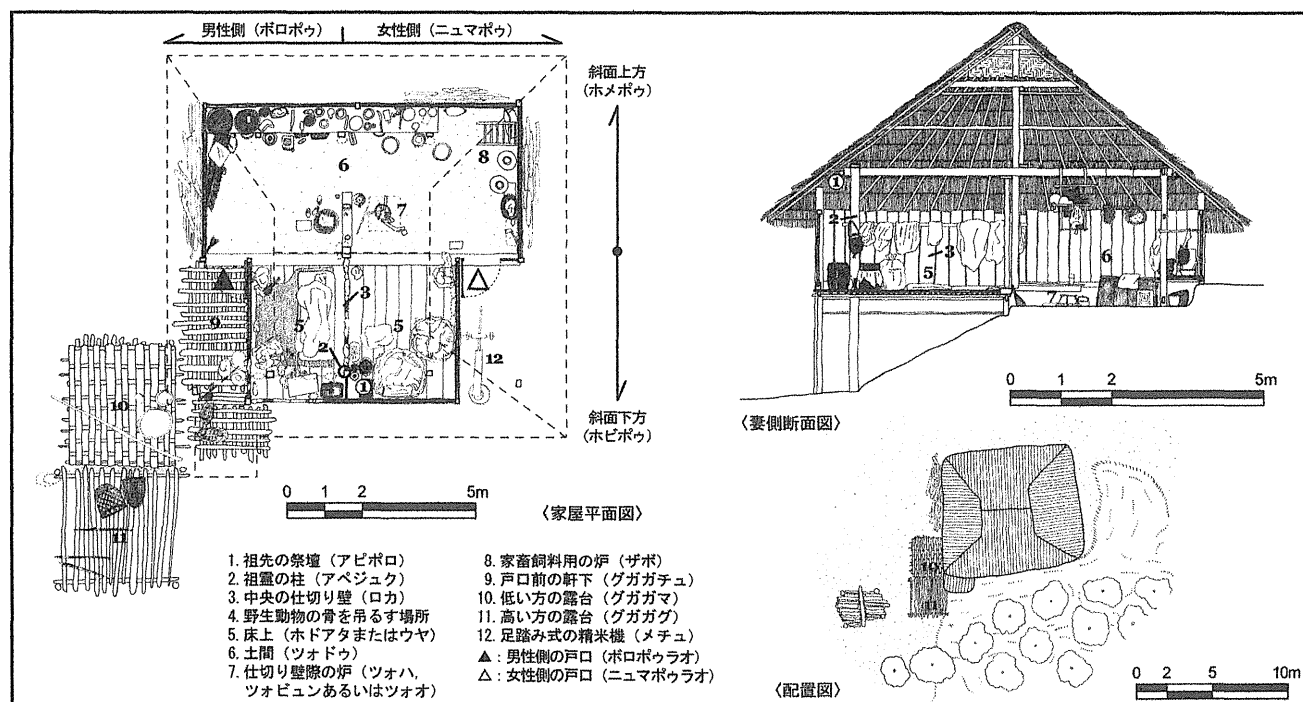


図2-4 V村の家屋事例

E村では、高床式の家屋を建設することと、斜面上方の空間に就寝することは、セットにして考えられている。高床式は地床式よりも多くの材料、手間、時間、人手を要するがゆえ、経済的に余裕がなければ、高床式の家屋を建設することはできないのだという。経済的に余裕ができ、高床式が建てられるような場合には、斜面上方の空間を就寝の場とする構成にした方がよいとされる。そのような家屋に暮らすことは「幸せ」であるといい、斜面上方の空間に就寝した方が「よく眠れる」ともいう。E村では、高床式が建てられはじめてから5年ほどのあいだに、斜面下方の空間を就寝の場とする地床式の家屋はなくなり、すべてが高床式へと移行したという。

E村では、家屋形式は変化したものの、以前と同じように、各世帯から男性ひとりずつを供出して「ゆい」の集団を結成し、家屋を建設している。何年もかかって準備した材料を使って、ほんの3日ほどで建てられるE村の高床式の家屋は、10年以上の耐用年数を有している。

3. ポンサリー県の事例

ポンサリー県では、アカの村はブーンタイ郡を中心に広く分布している。低平部の少ないポンサリー県はラオスでも屈指の未開地といわれ、国土の最北端に位置して中国、ヴェトナムと国境を接している。しかし近年、両国との貿易路を確保するための開発が急ピッチで進められており、今後の急速な変動が予想される。

ブーンタイ郡庁が置かれている盆地の先住の民族は、タイ・ルーといわれる。現在では盆地にさまざまな民族が入り込み、行政や物流の中心地として発展しつつある。しかし周辺の山地には、いまなお多様な民族集団がそれぞれに集落を形成し、焼畑をおこないながら自給自足に近い生活を営んでいる。

ブーンタイ郡では、郡内に数多くかつ郡域にわたって居住するチュピアに絞って予備調査をおこない、M村で悉皆調査を実施した。さらに隣接するサンパン郡にも足を運び、支族の事例採集をおこなっている。

3.1. チュピアとM村について

「チュピアの始祖はジョボであり、スミオから数えて23代目にあたり、その息子たちの世代がさらにウパやオマに分かれる。アカ発祥の地は中国のチュデミサーという場所であり、村の祖先はそこからラオスのブーンヌア郡を經由してこの地にたどり着いた。」M村の老人たちは、村の歴史をこのように伝えている。また、ラオスにいたった年代は定かでないが、20世紀初頭までは中国との国境付近で暮らし、70年ほど前にセンカムデン地区へやってきたという。

現在のチュピアのおもな居住分布域は、ブーンタイ郡庁のある盆地の北側から西側の山地に広がっており、中

国雲南省からラオスのブーンヌア郡を經由して南下したとする老人の説話と符合する。一方、盆地の東の山嶺を越えたブーンタイ郡からサンパン郡にかけては、同じアカの支族であっても南下経路は異なり、ニョートウー郡の国境からメコン川支流のウー川の上流を経て、現在の場所へといたっている。聴き取りをおこなったどの村でも、例外なくウー川の上流地域を經由して南下している。

M村はブーンタイ郡庁からおよそ20km西方にあり、竣工したばかりの幹線道路に沿った小高い山の上に位置する。周辺は急峻な山と谷が複雑に入り組んでいるが、集落は比較的なだらかな山の頂上と尾根を覆うようにして形成され、戸数65、人口358(うち女性178人)を擁する。

現在のM村は、1997年に形成されたものである。かつての村も現在の位置にあったが、火災で焼失したために、東斜面の下方へと村を移転させた。しかし、1986年から87年にかけて疫病が発生し、村を二分する事態になる。のちにふたたび現在の場所に戻り、新しい村として再建されたのである。かつてM村と分かれたL村は、M村から10kmほど離れた山地にある。両村はいまも婚姻関係を維持するなどして交流を保っている。

3.2. 村の形成と維持に必要な条件

チュピアの村を創成するにはいくつかの条件がある。まず、少なくとも4つ、できれば5つ以上のクランで構成される必要があるという。婚姻や葬儀などの人生儀礼にさいしては、同じクランの役職者(後述のズマ)の場合は自らの血筋にかかわるという理由で、儀礼執行を担うことができないとされている。とくに婚姻はふたつのクランの結びつきを意味するとされ、したがって第3のクランのズマに担ってもらわなければならないという。現実には、村を構成する大小すべてのクランがズマの役職を絶やすことなく村を維持することは難しい。M村の場合は9つのクランで構成されている。

チュピアの場合、同じクランであっても、両者の系譜を遡って結びつく世代から数え、下3代がすでに死去していれば、結婚は可能とされる。ゆえに、クランの数にこだわるのは、村うちで婚姻関係を充足させるためではなく、かれらの信仰世界を持続させるためであり、それが儀礼というかたちで顕現されるということである。

一方、チュピアの村には「ズ・ピ・チ・カ」という言葉が伝えられている。ズマ、ピマ、バジ(ジをチと言い換えたもの)、カーの4つの役職をさしており、村の運営には不可欠な役職群であることを意味する。

ズマは婚礼や葬儀などにおける儀礼執行の役割を担い、チュピアの習慣をしっかり受け継ぐことが期待されている。M村には6人のズマがおり、年長者から順位がついている。そのうち第4位のズマはプシュサンクウという役職を兼ねている。これはズマの職能の一部と

考えられており、村の門(ロッコン)やブランコ(ラチュ)の更新、陸稲の播種など、村の統合的な儀礼執行を担当する^{注19)}。村を創建するさいには、最初にプシウ・サンクウの家屋を建設しなければならないとされる。チュピアの村には不可欠な役職である。

ピマは霊との和平を調整する役職である。葬儀では、世帯員や弔問客を悪霊から護り、死者が祖先のところにけるよう、スミオから死者までの名前を連誦する。もうひとつは、霊に起因する病気の原因をつきとめ、治療をおこなうことである。M村のピマは死去したが、その下で補助役を務めたピザがふたりいる。ピザはピマから高度な知識や祈祷方法を伝授されてピマになるが、葬儀などピザに務まらない高度な儀礼のさいは、L村からピマを迎える必要がある。またM村には、霊と直接交渉し、霊から病気の原因や治療法の託宣を受ける、ニパと呼ばれるシャーマンが男女ひとりずついる。病気治療にピマとニパのどちらを選ぶかは病人の状態によるが、ニパは村の運営に不可欠な役職としてはとらえられていない。

バジは鍛冶師で、M村には3人いる。生活全般に必要な刃物などをつくるが、儀礼にかかわる役職としても欠かせない。ピマやピザのいくつかの儀礼や棺をつくるときに使う刃物などは直前に加工しなければならない。

カーは霊と人間の双方に関与して、村を護る役割と村うちに村の決めごとを周知させる伝令役を担う。かつては近隣の村との諍いを調停する重要な役割を担ったが、現在では村長やズマなどの指示にしたがい、スピーカーで村びとに呼びかけるのがおもな仕事である。国民国家の体制に組み込まれるようになって、カーの職務の多くは、村長や青年同盟などが担うようになっている。地方行政に依拠するこれらの役職や組織は、チュピアの村にはもともとなかったものである。

3.3. M村の集落空間(図3-1)

M村は、山の頂上部から北西にのびる尾根線に沿って形成され、平らな頂上部の北側に広場が、尾根線には主要通路がもうけられている。新しい幹線道路が村の北西部を貫通したために一部が分断されたが、村びとはこれによって集落の骨格が失われたとは考えていない。村の西側に立つ村の門がオモテの門(ジュークロッコン)とされ、一方、村の南東側にもうけられている門がウラの門(ジョトンロッコン)とされている。家屋は人間世界とされるふたつの門の内側にもうけなければならないとされる一方で、門の外側は無数の霊がすむ世界であるという空間認識は、幹線道路が敷設される前と変わらない。

村の北西側は幹線道路によって分断されているが、その先にはM村の人びとがチュウアケ(霊を祀る森)と称して崇める山があり、斜面にはブランコや若い男女の遊び場、森の霊に供え物をする祠(ジュフウカーへ)がもう

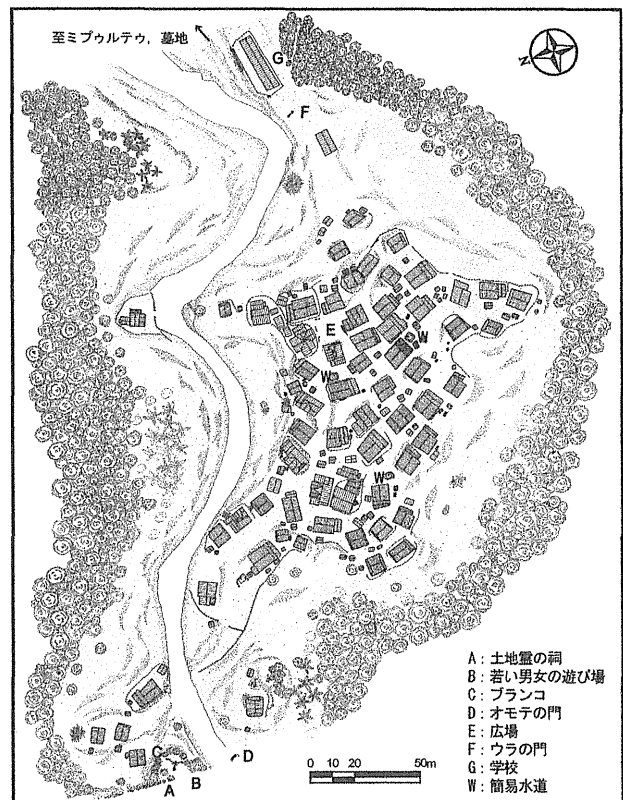


図3-1 M村の集落空間

けられている。チュピアの場合、ブランコは村の境界を意味する門の内と外とを問わないが、森の霊に供え物をする祠は、門の外側になければならないという。

村の主要通路は、オモテの門から南東の小高い丘に向かって尾根伝いにもうけられ、頂上部の広場へと通じる。広場のまわりは腰掛けを兼ねる低い柵で四角く囲われており、村の中心であることを強調したしつらえとなっている。家屋は等高線に屋根の稜線を合わせるようにして配置されている。しかし、家屋を配置することのできるなだらかな土地は尾根筋と頂上部近くに限定されているので、家屋密度は高い。東の斜面を下った谷沿いには、水浴び場やミプウルテウと称する水の霊を祀る門がもうけられ、さらに下流の対岸斜面には墓地が位置している。

3.4. ポンサリー県におけるアカの家屋の特徴と住まい方

ポンサリー県のアカの家屋は、プリアウパを含め、いくつかの特徴が明確である(図3-2, 3-3)。その空間構成をみると、地床式が圧倒的に多く、しかも、床上に対して土間が圧倒的な広さを占め、土間の片隅には足踏み式の粉碎機が置かれている。また、土間と床上とのレベル差が大きく、土間側から床上の縁に腰掛けることができないほどの事例もある。床上の空間が土間からみえないように入口部分が絞込まれているものも少なくない。

床上の構成をみると、男性と女性とに分かれていない事例が目立つ。土間からは入口が2カ所もうけられていても、内部に仕切り壁がないものや、逆にアカの家屋と

※各図の上端が斜面上方側、縮尺は1/250

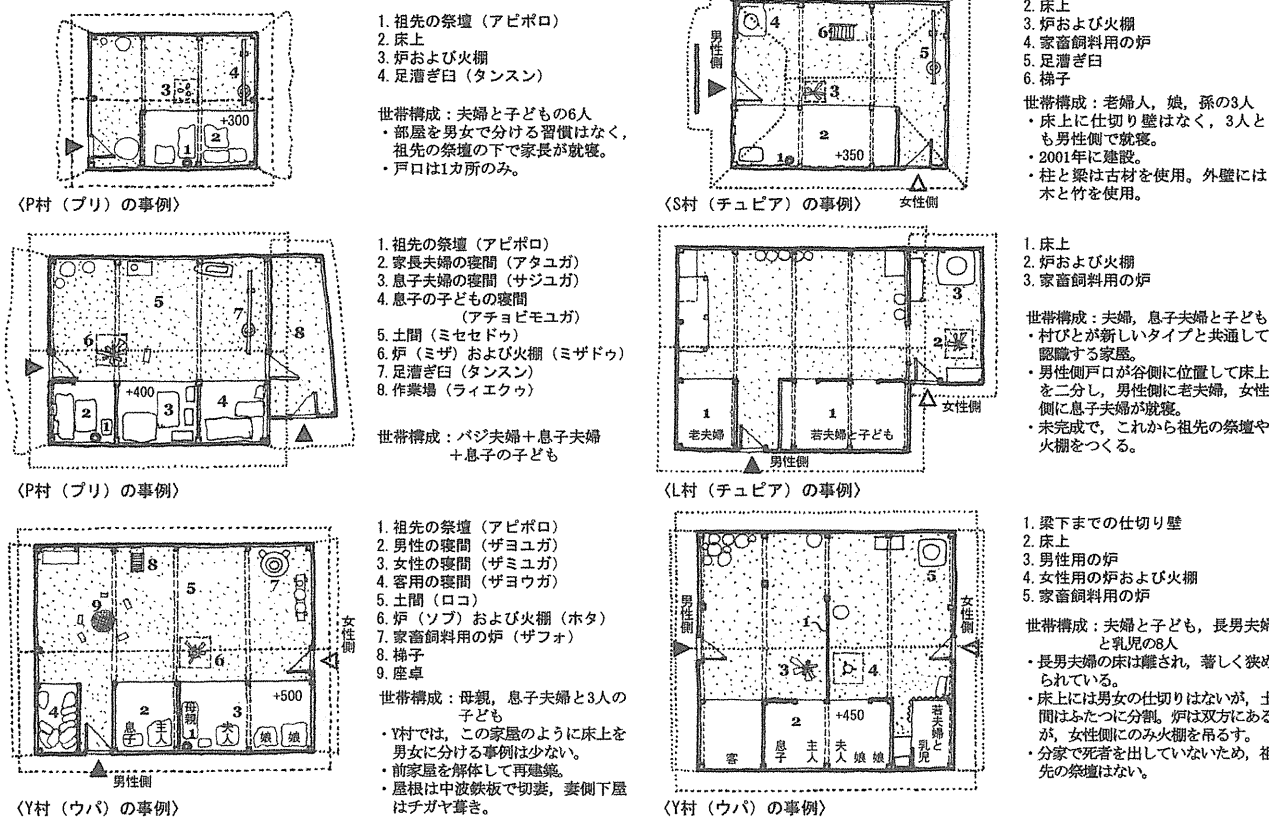


図3-2 ポンサリー県、プーンタイ郡に居住するアカの支族の家屋事例

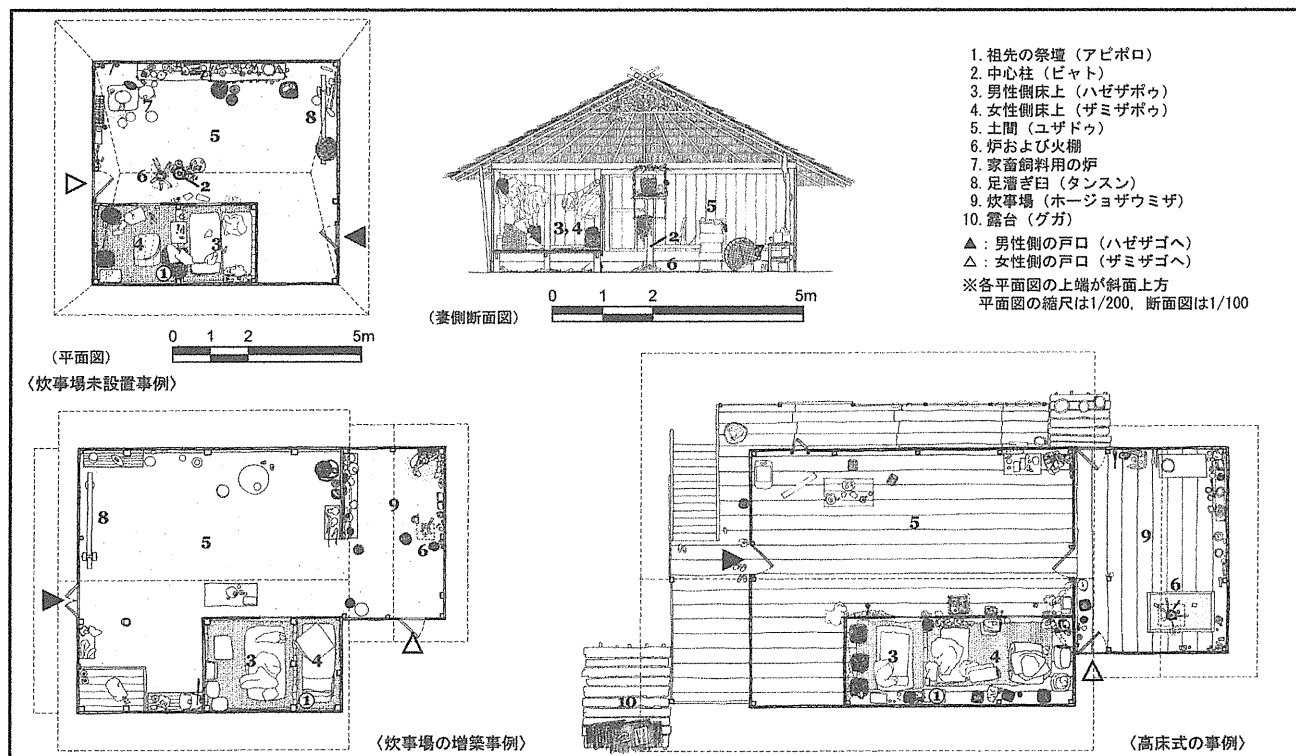


図3-3 M村の家屋事例

は思えないような小部屋に分割されているものなどもある。したがって、住まい方についても、男性と女性とに分かれて就寝する事例は少ない。床上が2室の場合は、ほとんどが夫婦と子どもとに分かれて就寝している。プリの事例には、3世代が世代ごとに床上を仕切り、上の世

代の床上に祖先の祭壇（アピボロ）を祀る事例もある。一方ウバの家屋には、男女の寝方も祖先の祭壇を祀る位置もアカの慣習どおりに住まう事例や、将来、祖先の祭壇を備えるときに床上を仕切る予定の家屋もある。

L村は53戸を擁してM村と由来を同じくする村である

が、1戸を除き、すべてが地床式である。床上と土間とのしつらえや男女の仕切り壁、祖先の祭壇の位置は比較的にアカの慣習を踏まえて構成されているといえる。しかし、住まい方をみると男女に分かれて就寝している事例、分けずに1室で就寝している事例、世代ごとに夫婦で就寝している事例などが混在する。

3.5. M村のかつての家屋の特徴と住まい方

チュピアのかつての家屋や住まい方は、北タイやシン郡のアカのそれから大きくはみ出るものではない。家屋は斜面上方側の土間と斜面下方側の床上で構成され、床上は背丈ほどの仕切り壁で男性側と女性側に分けられる。

土間には男性側と女性側の2カ所に戸口がもうけられる。前者は常に村の主要通路に向けてもうけなければならず、世帯員の日常的な出入りだけでなく、客を招き、儀礼をおこなう役割を担う。後者は屋内での家事作業のさいに出入りするほか、恋愛関係にある男性が娘を訪ねる戸口でもある。土間の女性側隅部には調理や食事の用具をのせる棚や足踏み式の臼(タンスン)が設置される。炉は中心柱(ビャト)を境に男性側と女性側の2カ所にあり、料理の煮炊きには女性側を使用する。男性と女性に二分される領域は、世帯にとってのオモテとウチに対応した使い方がなされている。

床上の空間は男性と女性に分割されるが、仕切り壁の土間側には人がすり抜ける大きさの穴が開けられ、夜中に男性が女性を訪ねる通用口として使用されている。就寝するときは頭を谷側に向けて横臥し、仕切り壁を挟んで家長夫婦が、その外側には子どもたち並ぶ。このとき家長夫人の頭部は、祖先の祭壇下方に位置することになる。若夫婦が同居する場合、子どもが生まれるまでは土間の男性側と女性側にそれぞれ寝台を組んで就寝するが、最初の子どもが生まれると、寝台を撤去して男性と女性の床上に移動する。

しかし、今日の役職者や老人のチュピアの家屋に対する考え方は変動を容認するものであり、次のように語られる。「チュピアの家屋のなかでもっとも重要なのは祖霊の祭壇と火棚(ホタ)である。男性と女性の空間を分ける壁や中心柱などの空間構成にかかわる要素はなくてもチュピアの家屋は成立する。また、炉についても不可欠なものではなく、儀礼のさいには火鉢のようなものを用意すればよい。」

M村の場合、男性と女性に分かれて就寝するアカの慣習から脱却し、同室で就寝をはじめるのは、いまから30年以上も前であるという。

3.6. 変動しつつあるM村の家屋

1997年に創建された現在のM村では、多くの家屋は移転したときの家屋を残しているが、移転後の1998年に炊

事場を増築し、既存部分と棟を分ける事例が出現した。その後、炊事場を同じように増築する事例が急速に増え、調査時点で38戸を数えるにいった。さらにここ2、3年は高床式への建て替えが進み、当初の2戸を含む11戸が高床式になっている。このように、M村における調査時点の家屋は、古いものと新しいものが共存し、しかも急速に変動しつつある過渡期を迎えているといつてよい。

このような局面を迎えた背景には、集落が再生されてからあまり年数を経過せず、家屋が十分に土地になじんでないということもある。しかし、それ以上に急速に進められている行政システムの浸透や経済活動の伸展がもたらす観念やモノの近代化の影響が大きい。村長の家屋は2004年に高床式で建てられている。まとまった資金と行政に強いパイプをもつ村長は、クムの大工に出来高払いの請負方式で発注し、村びとは家づくりに一切関与していない。役職者を媒介してこれまでともに描いてきた精霊世界や集落空間の伝統が失われつつあることを象徴する出来事であるといつてよい。

チュピアの家屋は通常、各世帯から男性ひとりずつを出して「ゆい」でつくる。地床式の家屋をつくる場合、材料を揃えるのに1カ月はかかるが、建設作業自体は3日で完了するという。「ゆい」には家づくりに卓越した村びとだけでなく、役職者や老人にも参加してもらい、さまざまな世代が参集する。役職者や老人の参加を得ることはチュピアの伝統を踏まえることを意味している。したがって「ゆい」の現場は、単に家屋を建設するだけでなく、チュピアの家屋を継承するとともに空間のつくり方を学習し、できあがった家屋を村の構成要素として認知する役割までも担うことになる。

4. まとめ

4.1. 支族による居住文化の差異性について

アカの家屋はその内部空間が、男性側と女性側に二分されることに最大の特徴があるといえる。さらに男女双方の空間は、食事や炊事のための空間と就寝のための空間をもつが、北タイ、ルアンナムター県のV村およびボンサリー県の事例では、就寝の空間が斜面下方側にもうけられ、斜面下方に頭を向けて横臥する。E村では、高床式へ移行したこととともなって、斜面の上下方向の構成が逆転したが、伝統的な家屋はV村の事例に類似するものであった。かれらに古くから伝わる空間構成および住まい方は、共通の普遍の特徴であるのかのようにとらえられる。しかしこれを部材の方向性からみると、差異性があらわれてくるのである。

アカの家屋を構成するそれぞれの部材は、立木の状態による方向性を重視しながら配置されている(図4-1)。北タイの場合、人間は昔から斜面下方に頭を向けて寝ていたので、木もそれにあわせて、末口を斜面下方に向け

るとされる。斜面上方に就寝の空間をもうける家屋はごく一部でみられるが、この場合、部材の方向そのままに、最大傾斜方向の空間構成のみを変えているので、人間が横臥したときの姿勢と部材の方向性が一致しないことから、「正しくない種類」とされる²⁷⁾。一方E村の場合は、人間の頭の方向に木の元口を向けるとされており、北タイとは真逆の方向性をもつ。しかも斜面上方の空間を就寝の場とする高床式に移行するさい、斜面上方を向く頭にあわせて、部材も木の元口を斜面上方に向けて組まれており、この点においても北タイとは対照的である。

また北タイとV村では桁方向の部材の方向性を違えている。北タイにおける桁方向の部材の方向性は、はるか昔、スミオが生まれるころまでは、人間と霊がひとつの家屋に暮らしていたという説話から説明される。その家屋は人間と霊が共同してつくり、現在のアカの家屋と同じように仕切り壁で二分されていたが、木材を切り出すさいに人間が木の末口側を担いだことから、桁材の末口側の空間に住むようになったこと、ある日霊と人間が仲違いをして、霊は森で、人間は家屋で暮らすようになったさい、人間がいた方に女性が住むようになったことに由来している。V村でも、人間と霊がひとつの家屋に暮らしていたとされるが、その家屋は仕切り壁のない一室空間で、人間と霊が混じり合って暮らしていたとされる。しかももともと人間が自らつくって住んでいた家屋に霊がやってきて、一緒に住むようになったのだという。したがって桁方向の部材の方向性については、北タイとはその由来を違えており、判然としなかった。

このように、家屋内部の空間の「かたち」を同じくする一方で、その意味内容はそれぞれに異なっていることがわかる。このような差異性は、アカに内包される文化的多様性としてとらえることができよう。

4.2. 文化変容の地域的メカニズムについて

ビルマに暮らすアカがタイへと南下をはじめるのは20世紀初頭とされる。1960年代以降、タイは近代国家への歩みを早めるが、その過程において、とくにアカをはじめとする北タイの山地民族諸族は、ケシ栽培、森林破壊、不法入国など、さまざまな社会問題の当事者としてとらえられるようになった。焼畑に対する規制が布かれ、生業に圧迫を受け、自給自足のシステムが立ち行かなくなった。しかし、これまで周縁として位置づけられてきたかれらが、低地での機会平等を求めても叶わなかった。

生計が逼迫し、祖先への供物の用意にも事欠くようになった北タイのアカのあいだでは、キリスト教徒になることで、アカの慣習からの脱却を図る者があらわれた。キリスト教徒になるということは、従来の信仰体系を放棄することであり、霊的存在との関係による従前の家屋や集落のつくり方に依拠する必然性も失われることになる。これを契機に、家屋内部を男性側と女性側に分けて住まう規範も失われていった。いまや北タイに暮らすアカの半数以上がキリスト教を信仰するといわれている。

ラオスは49もの民族集団で構成される多民族国家ではあるが、総人口の半数以上がラーオ族で占められている。しかし、ルアンナムター県とポンサリー県では、タイ・ルー、モン、アカなど、総人口の数パーセントを占めるにすぎない、いわゆる少数派の民族集団が、県人口の9割以上を占めている。さらにラオスでは、近代国家の形成過程において、タイでは頻用される「少数民族」という周辺の民族カテゴリーを用いずに、同じ「ラーオ国民」という範疇に組み入れられてきた。上記2県では、少数派の民族集団の出身者が県知事や副県知事といった要職に就くことも少なくない。北ラオスにみる限り、諸民族集団はそれぞれに文化的アイデンティティを維持しながら、地域社会での共存を図っている。

ラオスのアカの場合、従来の霊的存在への信念を保持しながらも、男女に分かれて住まう規範から、世代別に住まう作法へと自ら移行させて久しいポンサリーの事例をはじめ、E村における最大傾斜方向の構成の逆転、あるいは仕切り壁の有無にとらわれず、理念的に空間が分けられていることなど、「形式」にとらわれない、ダイナミックな文化の動態的側面を指摘することができる。

北タイでは近年、不法麻薬取引への関与が増大し、それによってもたらされた莫大な利益によって近代的なコンクリート家屋への建て替えが進んでいる。従来の信仰体系を維持する者のあいだでも、家屋内部を複数の個室で構成し、かつ祖先の祭壇をしつらえない事例がみられる。このような場合、別棟にもうけた炊事屋を、かつての家屋のように仕切り壁をもうけた床上と土間によって構成し、より奥まった側の仕切り壁際に祖先の祭壇をしつらえるなど、「形式」に固執する側面がうかがえる。

自律的で閉じたしくみをもつ共同体が、国家や地域社会へ統合されていく過程において、それらとのかかわり方がかれらの文化的アイデンティティに与える影響は少なくないことを、これらの事例は示しているといえる。

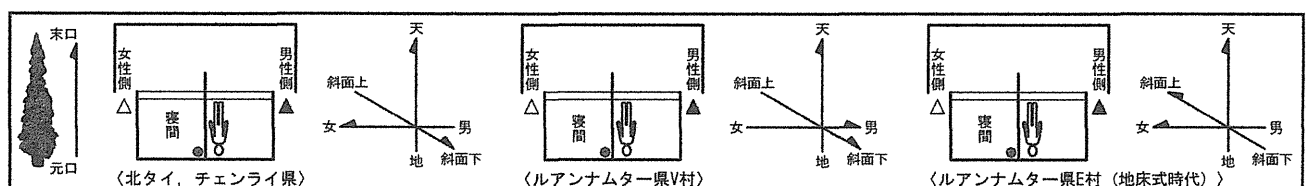


図4-1 アカの家屋にみる空間構成、住まい方と立木の状態による部材の方向性との関係

謝辞

本研究は、調査対象国であるラオスにもその成果を還元すべく、ラオス国立文化研究所と共同研究体制を組んでおこなった。プロジェクトの設立および運営にご協力いただいたチャンタピリット・チェムシスラート所長、ブンテン・スックサワット副所長、タノンソン・シブンフアン情報管理センター長に感謝申し上げます。

〈注〉

- 1) 文献1の用法による「ハニ＝アカ族」としてくられる集団は、中国に125万人あまり居住する〔文献1:59〕。また、ミャンマーには18万人〔文献2:5〕、タイには約48,500人〔文献3:5〕、ラオスには66,000人余り〔文献4:15〕が居住する。
- 2) ラオスのアカを対象とした研究はいまだ途上にあることから、支族の数も不定である。また、文献11ではジェビア (*Djepia*)、文献12ではチェビア (*Choe pia*) と表記される支族がいるが、本稿では、現地で聴き取った発音により「チュビア」と表記する。
- 3) ローン郡のプリ・ニヤイの村、G村で聴き取りをおこなったさいも、かれらはアカ語での自称を「ジュゴエ・アカ」であるとした。また北タイにも、「ジュゴエ・アカ」を自称する集団が存在する。
- 4) 近年ルアンナムター県では、中国の商人の仲介によってサトウキビやゴムなどの商品作物を栽培する村が急速に増えているが、E村にはまだそのような資本は入っていない。
- 5) 文献13によれば、ルアンナムター県に居住するアカは、一般的にビルマからラオス領内に入ったとされている。
- 6) E村でおこなわれる年中儀礼を新年から順に列記すれば、ガタンアピュロ (1月初旬、新年を祝う、祖先祭祀の機会)、ホーシューアピュロ (6月初旬、祖先祭祀の機会)、ミソロー (ホーシューアピュロの翌日、自然界の霊への献納)、ロッコンドウ (ホーシューアピュロの7日後、村の門の建設)、ヤクアピュロ (7月、陸稲の播種、祖先祭祀の機会)、ヤゴンショ (ヤクアピュロの翌日、焼畑の霊への献納)、イェクアピュロ (9月、ブランコの建設、祖先祭祀の機会)、ヤチオラアピュロ (イェクアピュロの約7日後、祖先祭祀の機会)、カイエアピュロ (ヤチオラアピュロの約7日後、「村のなか」に入り込んだ「病氣」を「村の外」へ追い出し、カイエの門を建設、祖先祭祀の機会)、ニボニェウ (カイエ以降ウドゥアピュロ以前、イナゴの捕獲)、ウドゥアピュロ (ニボニェウ以降、陸稲の収穫、祖先祭祀の機会) である。
- 7) E村のズマは現在の場所で暮らしはじめて2、3年後に、ほかの村へ移住してしまったという。
- 8) E村では、系譜を口述するのは葬儀のときのみで、ふだんは口述すべきではないとされており、始祖前後の系譜を数代聴き取るにとどまっているが、タイプに属する現村長は57代目にあたるという。
- 9) 最初に建設される家屋は、建設当日が自身にとって「よい日」にあたる男性をひとり選び、その人のために建てられる。
- 10) E村では、世帯にとって「よい日」とは、世帯員の誕生日以外の日であり、家屋の建設や更新、陸稲の播種や収穫などの世帯の行事は、このような「よい日」を目安にして日取りが決定される。アカは12日間をひとまわりをなすような日の数え方をしており、それぞれに特定の動物名が当てられている。E村では、スイギュウ (ニョ)、トラ (ハラ)、小さいウマ (タラ)、ロンという動物、ウサギ (シェ)、大きいウマ (モウ)、ヨウという動物、サル (ミョ)、ニワトリ (ガ)、イヌ (ク)、ブタ (アガ)、ホという動物の12種である。個人の誕生日はこうした動物名によってあらわされている。
- 11) 村が火災に遭ってもコメがあれば生きていけるので、米倉は

村から離れた場所にもうけるべきとされている。

- 12) V村では、父親から祖先の祭壇を受け継ぐのは長男か末男であり、それ以外の兄弟は、通常自らの家屋に祭壇をつくることはない。祖先の祭壇をもたない世帯は、同一クランで祖先の祭壇をもつ世帯とともに祖先祭祀をおこなうとされる。
- 13) M村でおこなわれる年中儀礼を新年から順に列記すれば、ゴコラコパ (1月、新年を祝う、祖先祭祀の機会)、チャレレ (3月、もち米の製菓、祖先祭祀の機会)、ヤクアピュロウ (5月、1日目に村の門の建設、2日目に祖先祭祀、3日目に森の霊への献納、日をあけずに陸稲の播種)、カザブカ (6月、陸稲の生育)、クカシュリイ (6月、森の霊への献納)、ヤチャヤロロウ (7月、土地の使用を霊に請う)、ラチュアピュロウ (7月、ブランコの建設、祖先祭祀の機会)、ハチアピュロウ (8月、祖先祭祀の機会)、ニバンアピュロウ (10月、1日目に祖先祭祀、2日目にバッタの捕獲、3日目に水場の霊への献納) である。

〈参考文献〉

- 1) 稲村 務：アカ族・ハニ族・アイニ族—中国雲南省西双版纳州における「アカ種族」の国民統合過程—、東南アジア—歴史と文化、第25号、pp.58-82、1996
- 2) Lewis, P. : Akha-English-Thai Dictionary, Development and Agricultural Project for Akha, Chiang Rai, 1989
- 3) Technical Service Club : The Hill Tribe of Thailand, Tribal Research Institute, Chiang Mai, 1995
- 4) Committee for Planning and Cooperation : Results from the Population Census 1995, National Statistical Center, Vientiane, 1997
- 5) 若林弘子：高床式建物の源流、弘文堂、1986
- 6) 畑 聡一：離島集落における住居及び住居集合の共同性に関する研究、1995年度東京大学学位論文
- 7) 清水郁郎：北タイ・アカの家屋に関する研究—家屋の形式とその変化への視点から—、2000年度総合研究大学院大学学位論文
- 8) 新井清水：タイ北部、アカおよびリスにおける居住文化の変容過程に関する研究—家族と社会をめぐる10年の軌跡から—、2003年度芝浦工業大学学位論文
- 9) 竹村卓二：アカ族の父子連名制と族外婚—とくにリニジの分裂をめぐる—、社会人類学年報、vol.7、pp.1-34、1981
- 10) Chazee, L. : The Peoples of Laos - Rural and Ethnic Diversities, White Lotus, Bangkok, 2002
- 11) International Labour Organization: Policy Study on Ethnic Minority Issues in Rural Development, International Labour Office, Geneva, 2000
- 12) Goudineau, Y. : Resettlement and Social Characteristics of New Villages - Basic needs for resettled communities in the Lao PDR, vol.2, UNDP/UNESCO, Vientiane, 1997

〈研究協力者〉

平田 智隆	芝浦工業大学大学院	修士課程2年
福山 愛	芝浦工業大学大学院	修士課程1年
五十嵐佳衣	芝浦工業大学大学院	修士課程1年
櫻庭かな子	芝浦工業大学工学部	4年
鈴木 美香	芝浦工業大学工学部	4年
松田 直子	芝浦工業大学工学部	4年
河合 広美	芝浦工業大学工学部	3年
小杉今日子	芝浦工業大学工学部	3年
川口 幸	芝浦工業大学工学部	3年
川上さやか	芝浦工業大学工学部	3年
東 寛 孝明	芝浦工業大学工学部	3年

※所属は2004年度時点